

先日、出張で大坂に行った際、昼食の話題が偶々中国と我国の関わりに関する事になった。中国が現代版の「踏絵」を、中国進出を企図している企業に強いているとして、日本関西経済界の各種会合で問題と言うか話題になっているらしい。

日本の首相や閣僚も、かつては、憲法問題等で踏絵を踏まされた事もあった。未だに靖国神社参拝に関して踏絵を踏ませようとしている。

踏絵と絵踏は、厳密には違う。踏絵と言うのは、江戸時代のキリシタン検閲制度である絵踏行事に用いた聖画像をいい、踏む行為を絵踏という。然しながら、次第に混用して絵踏も踏絵と称した。1628年(寛永5)長崎に始まって1858年(安政5)廃止されるまで九州各地で制度的に実施された。同様の弾圧行為は、世界各地で行われたのであろう。



中国に進出して企業活動を行なおうとする各企業に対し、「貴社は、日本の政治指導者が靖国神社に参拝することをどう思いますか?」「日本は過去の歴史を反省し、それに立脚して中日友好を進めていると思いますか?」「南京虐殺や従軍慰安婦問題についてどう思いますか?」等々の質問(飽くまでも小生の推測ではあるが・・)を投げ掛けて、中国寄りなのか、或いは反中国なのかを見極めて、選別的な経済的対応をせんとしていると疑わざるを得ない。我に味方するものには飴即ち利を与え、意に染まぬ企業には鞭即ち不許・認可をする(可能性があるぞと思わせるだけでも十分な効果があろう。)と言うような誠に卑劣な手段である。

どの程度の効果があるか定かではないが、熾烈な競争を繰り広げている企業であればある程、その効果は期待出来るのだろう。恥ずかしながら、人間は弱いものである。まして、個人の場合でなく会社の命令であり会社の為であるという大義名分があるので、節を曲げることに抵抗感が少なくなるようだ。

政治経熟と言われる日中関係である。対中貿易が対米貿易を上回ったと言われる今日、日本企業の中国進出には目覚しいものがある。中国は、日本企業が中国進出なくして業績拡大はないと信じているが故に、かかる戦術を打ち出しているのだろうし、日本企業も何としても中国に進出し、或いは有利な条件で企業活動が出来るべく、節を取って曲げてでも異論を唱えない節がある。

一社が妥協すれば、他の社も当然の如くに追随して何時しかそれが大勢となってしまう。一つの妥協は次なる妥協を産み、小さな妥協は大きな過誤となってしまう危険性を内包している。

ヤミ米を食するを潔しとせず、むしろ餓死するを選んだと言う終戦直後の裁判官の志操の高さなど今や昔話に過ぎない。日本人から志の高さはとっくに失われている。悲しいけれども、そう断ぜざるを得ない。

日本だけが踏絵を踏まされているのではないのかも知れないが、日本に対しては余りにも露骨である。

米国も中国の巨大市場に魅力を感じて居るのだろうが、中国の米国に対する対応は日本

のそれに比して穏やかすぎる。中国はアメリカに楯突いても仕方ないと思っているのだろう。圧倒的な軍事力の差もあり、当面と言うか自らの力が米国と拮抗若しくは超越するまでは、波風を立てないとの方針で臨んでいよう。

一方、日本は、軍事的な力がそれほどある訳ではなし、民族としてのアイデンティティも弱く、少し恫喝すれば直ぐに手を挙げる、国内には中国シンパも多く彼等を焚き付ければ国内世論など自由に操作も出来るなどと侮っているとしか思えない。

日本企業が中国に深入りし過ぎている危険性はないのか。リスク管理が出来ていない。誰でもがバスに乗り遅れるなどばかりに、中国に進出している、その状況を憂える。危険は分散すべきである。BRICs と言われる国々との関係を再構築した方が良いのではないだろうか。